

捨てられた聖女は、 沈黙を破って 世界を壊す

声を代価に、真実だけが見える

『捨てられた聖女は、沈黙を破って世界を壊す』

白峰結衣は、職場でも家でも都合のいい道具として使われ続けた三十歳である。ある冬の夜に駅の階段で倒れ、目を覚ましたときには異世界の廃修道院にいた。偽物と判定された聖女候補として。

プロローグ

その日、結衣は缶ビールを二本と鮭のおにぎりを一つ買った。

部屋で待っている人間はいない。それでも結衣は、明日の朝に食べるものと今夜飲むものを分けて袋に入れた。段取りだけは体に染みついている。

駅の階段は改修中で、右半分が板で塞がれていた。狭くなった左側を人が数珠つなぎに降りていく。結衣はその列の後ろについた。

足が、段を踏み外した。

いや、膝が言うことをきかなかった。

視界が斜めになる。誰かの鞆の角が頬に当たった。袋の中で缶が鳴った。

「ちよっと」

誰かが言った。迷惑そうな声だった。

結衣は、その声を最後に聞いた。喉の奥で細い管が潰れるような音がして、それから何もかもが遠ざかった。倒れる間際に考えたのは、明日の会議の資料をまだ印刷していないということだった。



第一章 廃修道院

匂いで目が覚めた。

濡れた石と苔と、その奥に甘く腐った果実のような匂いが混じっている。病院ではない。結衣は目を開ける前にそれを知った。

天井が高かった。石を組んだ弓なりの天井に、割れた窓から朝の光が斜めに落ちている。光の

帯の中を埃が上がったり下がったりしていた。

「起きたね」

声のほうへ顔を向けると、初老の女がこちらを覗き込んでいた。灰色の髪をきつく後ろで束ねている。皺の多い顔で、瞳だけが妙に若い。人を値踏みするときの目つきだと、結衣は思った。会社にも同じ目をする人間がいた。

「ここは……」

出たのは声というより、喉が勝手に鳴った音だった。

「辺境の修道院さ。もっとも、修道院と呼べるほどのものは残っていないがね」

女はヘルガと名乗った。院長代理だという。それから壊れ物を扱うような手つきで、結衣の背に硬い枕を差し込んだ。

「あんたは聖女候補として召喚されて、偽物だと判定された。二か月前の話だよ」

聖女。候補。偽物。

意味が頭の中でほどけていく。結衣は自分の手を持ち上げた。

小さい。

指は細く、爪は短く切り揃えられ、皮膚は日に焼けていない。キーボードで節くれ立った三十歳の手ではなかった。

「その体は十六だとき。神殿の記録にそう書いてある」

ヘルガはそう言って立ち上がった。スカートの裾が石の床を払う音が、やけに大きく響く。

「井戸の水汲みと廊下の拭き掃除が今日の仕事だ。できるね」

疑問の形をしていたが、疑問ではなかった。

結衣は頷いた。

ここでも、そういう場所なのだ。

廊下は長かった。

石の壁のあちこちに亀裂が走り、雨水の染み出した跡が茶色い地図を作っている。色硝子の嵌

まっていた窓は半分が割れて、外から板を打ちつけてあった。板の隙間から差す光だけが白い。結衣は木の手桶に井戸の水を汲んで、床を拭いた。

十六の体は思ったより力がなかった。水を含んだ布を絞るだけで手首が震える。膝が冷たい。石の床から立ちのぼる冷気が、膝頭から腿へと上がってくる。

通りかかった使用人の男が、鼻を鳴らした。

「おい偽物。そこが終わったら厨房の薪も割っておけ」

「……はい」

「まったく。本物の聖女様がこっちに来ていりゃ、俺たちがこんな辺境で腐ることもなかったんだがな」

男は足音を響かせて去っていった。結衣は布を絞る手を止めなかった。

言い返さなくていい。言い返せば長引く。私が黙っていれば丸く収まる。

前の世界で何百回も自分に言い聞かせた文句を、結衣はこの世界でもそのまま使った。使い慣

れた道具というのは手放しにくい。

日々は淡々と過ぎた。

日の出前に起きる。井戸の水を汲む。廊下を拭く。薪を割る。洗濯をする。竈の灰を掻き出す。皿を洗う。庭の草を抜く。それから、使用人たちの顔色を見て次に何をすればいいかを当てる。当てるのは得意だった。前の世界で十年やってきたことだ。

誰も結衣の名前を呼ばなかった。おい、お前、偽物。それが結衣の名前になった。

修道院には使用人が五人と、ヘルガがいるだけだった。かつては聖女候補の修行所として賑わっていたと聞いたが、今はただ風化を待っている建物だった。

月に二度、近くの村から荷が届く。荷を運んでくる村人たちは、結衣を見ると必ず立ち止まった。

「あれが偽物聖女かい。普通の顔だねえ」

「本物の聖女様は王都で神殿にお仕えなんだと。比べるのも失礼な話さ」

「でも雑用にはなるんだろう。ただ働きなら文句もあるまいよ」

笑い声が背中にかかる。結衣は聞いていた。耳を塞ぎもせず、全部聞いていた。

夜、屋根裏にあてがわれた薄い布団の中で、結衣は膝を抱えた。小さな窓から月が見える。この世界の月は前の世界のものより白かった。

自分の手を目の前にかざしてみる。小さくて、白くて、爪だけが不揃いに割れている。

この手で前の世界では何をしていたか。誰かのために。誰かの都合のために。

ありがとうと言われた記憶を探した。三十年分を端から辿って、見つからなかった。探し方が悪いのだろうと結衣は思った。そう思うことにしてきた。

草を抜いていて、一度だけ妙なことがあった。

庭の隅に枯れた薔薇の株があつて、結衣は根元の土を掌でならしていた。土は乾いて粉のようだった。手を離れたあと、その土だけが黒く湿っていた。水はやっていない。

結衣は少しのあいだ、その黒い土を見ていた。それから草搔きを取り上げて、別の場所へ移った。

第二章 沈黙の契約

その扉を見つけたのは、地下の食料庫に在庫を数えに降りたときだった。

石段の奥、黴の匂いが濃くなる先に、鉄の扉があった。蔦の根が扉と枠の隙間に食い込んでいた。何年も開けられていない扉だ。

結衣は手を伸ばした。なぜ伸ばしたのかは、あとで考えてもわからなかった。

蝶番が長く軋んで、扉は思ったより素直に開いた。

小さな部屋だった。石の壁に、見たことのない文字が刻まれている。読めるはずがないのに、目で追うと意味が頭に流れ込んでくる。

中央に石の台があり、その上に一冊の本が伏せて置かれていた。

結衣が表紙に触れると、頁が勝手に開いた。文字が青白く光る。夏の田圃で見た蛍の色に似ていた。

声を封じよ。己の声を代価として、他人の真を見とどけよ。

嘘を見抜き、罪を暴き、隠された心の声を聞く力を与えよう。

ただし代償は重い。契約した者は、自らのただけに言葉を使う日まで、己の本音もまた声にならぬ。

結衣の指が震えた。

嘘に気づかなかったわけではない。気づいていた。気づいて、見なかったことにしていた。

上司の「君の頑張りは評価している」は、次の仕事を渡すための前置きだった。母の「あなたのために思って」は、母自身が安心するための呪文だった。別れた男の「いつかちゃんとする」は、いつまでも来ない日を餌にする言い方だった。

全部わかっていて、目を閉じた。閉じていれば居場所が残るからだ。

結衣は本の上に掌を置いた。

失うのは声だという。声など、前の世界でもろくに使っていない。嫌だと言ったことも、助けてと言ったこともない。棚に仕舞ったまま一度も使わなかった食器のようなものだ。

「契約します」

そう言った瞬間、喉の奥で細い管が潰れる音がした。

駅の階段で倒れたときと同じ音だった。ただし今度は、意識が近づいてきた。壁の文字が一本ずつ浮かび上がって、意味になった。空気の中の埃の一粒ずつに輪郭がついた。

そして結衣の喉から、音が消えた。



翌朝、使用人頭のマルタが井戸端で結衣を見つけた。

「おい偽物。今日はまず洗い場を」

マルタが口を開いた瞬間、結衣の視界にもう一つの層が重なった。マルタの肩のあたりに、言葉になっていない言葉が浮いている。

この子を置いておけば、あと数年は雑用が只で済む。王都からの施しを少し横に流せば、三年で王都に移る金が貯まる。あと三年。

結衣の手が止まった。

そういうことだったのか。偽物だからここに置いた。誰の目も届かないからここに置いた。使
い勝手がいいからだ。

結衣は何も言わなかった。言えなかった。ただ滑車を回して桶を引き上げた。

マルタが眉を寄せた。

「何だい、黙りこくって。相変わらず気味の悪い子だね」

結衣は頭を下げた。いつも通りに。ただし今度は、下げた頭の下でマルタの肩のあたりを見て
いた。

それから数日で、修道院の人間の中身がひととおり見えた。

厨房のベンは食料を村の商人に安く流して差額を懐に入れていた。

黙っている間に掘れるだけ掘っておこう。あの子が王都に呼び戻されることはあるまいが、万
一目立てば面倒だ。あと半年で十分だ。

洗濯場のリーネは、一番重い仕事を必ず結衣に回した。理由は年齢ではなかった。

膝が痛い。この年で石の床を磨くのはもう嫌だ。あの子がやってくれば私は座っていられた。誰もが自分のために動いていた。結衣のためではなく、結衣を使って自分の都合を満たしていた。

前の世界と同じだ、と結衣は思った。

違うのは目を開けているということだけだった。世界は何も変わらない。変わったのは結衣の側だけで、そのぶん世界は少しだけ薄汚れて見えた。

声が出ないのは、思ったより不便ではなかった。もともと使っていなかったのだから当然である。不便だったのは、返事ができないせいで殴られる回数が増えたことだ。頷きは、声ほど早く届かない。

第三章 辺境の領主

カイエン・ヴァルデが修道院に来たのは、契約から半月ほど後のことだった。

結衣は庭の草を抜いていた。秋の風が出ていて、指の関節が赤くなっている。土は湿って重かった。この体になってから、寒さも痛みも前より大きく感じる。器が小さくなったぶん、中身が

溢れるのだろうと結衣は思っていた。

蹄の音がした。

顔を上げると、正門のほうから黒馬が一頭、坂を上つてくるところだった。乗っているのは男が一人。黒い髪に灰色の目をしている。整った顔立ちだが、その整い方が石像に似ていた。

結衣の視界に、何も浮かばなかった。

他の人間なら肩のあたりに必ず何かが見える。この男の周りだけが、雪の積もった畑のように白かった。

「どちら様で」

マルタが慌てて建物から出てきた。結衣は庭の隅からその様子を見ていた。

「これはヴァルデ領主様。何の前触れもなく、いったい」

「視察だ」

低くて平らな声だった。抑揚が削つてある。

「辺境の施設は放っておかれる。王都の目が届かないからといって、腐らせておくわけにはいかない」

マルタの顔から血の気が引いた。同時に、肩のあたりの言葉が濁った。

視察。まずい。帳簿を直してある。食料のことも。あの子は口がきけないのだから、告げ口の心配だけはない。

（体験版はここまで）